

普仏戦争 VIII — 地方の決起 —

松 井 道 昭

第1章 新政府への抵抗

第1節 王党派の思惑

スタンに近いフランス北辺地域のアルデヌヌ、エース、ソンム、マルヌ、ノールの各県にはスタンからの逃亡兵で溢れた。パリの政府がまだスタン戦の模様を公表する前に、北仏の住民は戦闘の結果をいち早く知っていた。近いうちに祖国に何か大きな政変が生じるかもしれないということ、も。

9月4日のパリの革命はその日のうちに、あるいは翌5日に、遅いところでも6日中にはフランス全土の知るところとなった。臨時政府の内務大臣ガンベッタは政令を発し、全国の県知事および郡長を解任し、共和主義者にとって代えた。その際、彼はしばしば地方の軍人を任命した。帝政はもはや不人気だったため、概して地方は共和政を好意的な態度で迎え入れた。ナポレオン三世がスタンで捕虜になるという不名誉な出来事に強い衝撃を感じたボナパルト派は、地方諸県での政権交代に抵抗するそぶりを見せなかった。

パリに臨時政府が誕生したのだが、この町がやがて敵に包囲される危険が生じ、ここに本拠地を構えていたのでは以後の戦争指導に支障を生じる恐れが出てきた。そのため、臨時政府はロワール河畔の町トゥールに派遣部 *Délégation* つまり政府の臨時出張所を設置することにした¹。

1 これは9月12日付の政令（*Décret*）に見える。Cf. *Ministère de la guerre, Décrets, arrêtés et circulaires de la Délégation du gouvernement de la Défense nationale hors de Paris relatifs à l'organisation et la l'administration de l'armée*, J. Dumaine, 1871, 220 p., pp. 1-2.

その先遣隊がトゥールに到着したのは9月13日だが、それからほぼ1ヵ月後、内務大臣ガンベッタが気球でパリを飛び発ち、ここに着任するのである。こうして、この政府派遣部が暫時、パリに代わってフランスを指揮することになる²。

そこで、われわれも地方の出来事に目を移してみよう。地方の状況はきわめて混沌としていた。フランス北部、東部、中部は相次いで敵の侵入を受け、好むと好まざるにかかわらず戦争に巻き込まれ、それぞれ臨戦態勢に入ったが、その対応は政治的な思惑も相俟って地域によってまちまちだった。

共和主義の伝統がもともと強い南西部と南部の諸県は、ガンベッタの政令に先んじ共和主義者をそれぞれの指導者に選んだ。ニーム、ニース、マコン、サン＝テチェヌヌ、ボルドーなどではパリの革命が伝わるやいなや、暴動が起き、トゥールーズにいたっては自治政府（コミューン）を宣言するほどだった³。

ガンベッタはオート＝ガロンヌ県知事にアルマン・デュポルタルを任命した。デュポルタルはサント＝ペラジー牢獄から出たその足で任地に直行した。彼は9月9日にトゥールーズに到着し、そこで緊迫状況に出くわした⁴。すでに8月末から南部諸県はみな、中央政府に対して叛旗を翻しているような状態だった。パリの九月四日革命ののちになると、穏健共和派を乗り越えて急進共和派が進出した⁵。

ここで強硬に抗戦を主張したのは共和主義の闘士たち、それも社会主義への傾斜をもつ共和主義左派—雑多な潮流から成るが—である。特に南部諸県の共和派は革命当初から中央（国防政府）の弱腰に不審の念をもちつづけていたため、「南部同盟」を結成し（9月18日）、たとえ中央

2 Roth, François, *La guerre de 70*, Fayard, 1990, 778p., p.212.

3 Steenacker, François F. et François Le Goff, *Histoire de gouvernement de la Défense nationale en province, 4 septembre 1870-8 février 1871*, 2 vols, Paris, 1884, tome 1, pp.70-80.

4 Roth, François, *Op.cit.*, p.212.

5 Steenacker et Le Goff, *Op.cit.*

政府が途中で和戦に転じるようなことがあっても、抗戦を続けることを誓いあった。「南部同盟」は徴兵と軍事物資の徴発の権限をもつと宣言する。マルセイユとペルピニャンでは政府機関と衝突し、混乱状態に陥った。「南部同盟」は9月26日に宣言を発し、トゥール派遣部に代表を送ったが、トゥールはこれを歓迎しない⁶。

パリに対抗する意味でいちばん先鋭的だったのはリヨンである。ここではもともと第一インターナショナル、フリーメースン、その他の秘密結社の影響力が強く、スタンの敗報が舞い込むやいなや、4日の朝早いうちに民衆が県庁前広場に押し寄せ、庁舎内に侵入し、フランス革命の故事に倣い「公安委員会」を結成⁷。パリへの呼びかけのなかで、首都も公安委員会を組織するよう要求し、ともに共和政を旗印に果敢に抗戦に立ち上がることを訴えた。ガンベッタが派遣した知事シャルメル＝ラコーは「パリからの派遣者知事殿」と呼ばれた。そこに、中央に対する明らかな挑戦的態度が見られる⁸。

とはいえ、全体としてみた場合、地方は国防政府に協力的であったし、共和政の維持のために、なんとしても戦争に勝利しなければならないとの自覚をもっていた。地方が中央に対して批判の目を向けたのは、抗戦のやり方、つまり戦争指導の手緩さに対してである。地方は、中央政府がフランス革命の古事に倣い、すべての権力を掌握し、総動員令を発し、徴発・徴用をもっと迅速かつ徹底的にやれと主張したのである⁹。また、軍隊の指導部を依然としてボナパルト派が占めている点も気に入らず、彼らの即座の罷免を要求した。この強硬な態度に接した各県庁はうろたえるばかりだったが、今さら「国防」の看板を下ろすこともできず、さりとて過激派勢力の言いなりに戦争を続けることにもためらいを覚えて

6 Cf. Roth, *Op. cit.*, p.213.

7 Desmarest, Jacques, *La Défense nationale, 1870-1871*, Flammarion, 1949, 478 p., pp.84-85.

8 Roth, *Ibid.*

9 *Enquête parlementaire sur les Actes du gouvernement de la Défense nationale*, tome 1: *Dépêches télégraphiques officielles*, Versailles, 1875, pp.24-30.

いた。

共和制は総じてフランス全体において唯々として受け入れられた。ヴォージュ県の新知事のエミール・ジョルジュ弁護士はエピナルからの電文で、「当地では共和制は住民によって大歓迎され、勇気を奮い起こした」と説明。ヨンヌ県の新知事に就任したのは共和派の弁護士イポリット・リビエールだが、県庁の長官として同地出身のポール・ベール生理学教授を指名。彼は「ありとあらゆるところから決起しよう。そして抵抗を準備しよう」、と熱情溢れる宣言を発した。

新知事たちがもたらす報告はいずれも精気溢れるものばかりで、楽天的傾向がうかがわれた。すなわち、「政治状況はきわめて良好」（ドゥローム県）、「状況は満足すべき状態」（シェール県）、「いかなる騒擾もなし」（コート＝ドール県）、「平穏」（オーブ県）、「共和制はどこでもすなりと、しかも多くのところで熱狂をもって受け入れられた」（ノール県）¹⁰。

しかし、共和制を根づかせると同時に戦争準備するというのはけっして容易な業ではない。なぜなら、支持者や協力者がいる一方で、少なからぬ数の妨害者がいたからである。すなわち、ボナパルト派の残党たち、帝政下で彼らとしっかり結びついていたカトリック教会、そして、帝政崩壊後は自分らの出番だとばかり、てぐすね引いて待ちかまえるブルボン派とオルレアン派の王党派らは、新たに樹立された共和主義政権を苦々しい眼で見つめていた。彼らは新たな野党として共和政権の船出の前に立ちはだかり、陰に日向に政府行動の妨害に立ちまわるのである。これら新しい野党各派はそれぞれ思惑を内に秘めていたが、反共和主義という点では一致して行動する。地方の名望家、富裕な農民、北仏の労働者（伝統的にボナパルト派の影響下にある）、聖職者らがそれである。とはいえ、彼らは“国家危急時に利敵行為を働いた”という非難が浴びせられるのを恐れ、当初は慎重な行動に徹して抗戦準備に協力の態度を

10 Roth, *Op. cit.*, p.214.

見せるほどだった¹¹。

地域的な偏りもある。伝統的に王党派が根を張り、狂信的なカトリック教徒の多い西部フランス（ブルターニュ）では共和制の樹立宣言とともに一時、不穏な空気が流れた。これらの地域がはたして中央政府に帰順するかどうか危ぶまれたが、臨時政府の首班にトロシュが就任すると、すぐに落ち着きを取り戻した¹²。トロシュはブルターニュ出身であり、敬虔なカトリック信者として知られていた。その意味でトロシュは国民的和合の象徴としてふさわしい人物であった¹³。これらカトリック地域の住民は国難を眺めるのと同じ度合いの関心をもって、ローマ教皇庁をめぐるイタリアの趨勢を眺めていた。イタリア軍がローマに侵入することによって、イタリア統一問題はついに決着した¹⁴。だが、それは西部フランスのカトリック教徒たちにとっては不吉な知らせであり、落胆させるに十分であった。彼らがパリの革命をすんなりと受け入れてしまったのも、このイタリア問題の帰結と無関係ではなかったようだ。メース、ブルターニュ、アンジューは伝統的にブルボン派の強い地域だが、当面は形勢観望の立場にまわる。

一方、同じ西部フランスでもレンヌ、ナント、ブレストなど都市部にはもともと共和主義の核があり、パリの革命に呼応して彼らが県庁の要職を占め、県下に号令を発した。ナントでは医師のゲバンが知事に就き、

11 Ibid.

12 Ibid.

13 *Enquête parlementaire sur les Actes du gouvernement de la Défense nationale, op. cit., tome 1: p.400.*

14 フランスが国難の最中にあつたのとちょうど時を同じくして、イタリアの統一問題、つまりサルデーニャ＝ピエモンテ王国とローマ教皇庁の対立が最終局面を迎えていた。フランスは以前からローマ教皇の要請により警護のためローマに派兵していたのだが、普仏開戦で兵を引き揚げた隙を突いて、サルデーニャ＝ピエモンテはついにローマ市内に侵入し、イタリアの統一を成し遂げた。ローマはイタリアの前に屈し、今は亡きカプールの宿願はついに達成された。時に1870年9月10日のことである。

イタリアでガリバルディ軍とピエモンテ軍の攻撃から教皇国家を警護していたフランス軍がローマを撤収し帰国した。シャレットとカトリノーを指揮者とするこの軍はそのまま、編成途中のロワール軍の中核を成すことになる。

ルネ・ワルデック＝ルソー（後のドレフュス事件を落着させた政治家の父）が市長となった。彼らはガンベッタの諸決定を承認する。ナントの市民はどちらかという受け身にまわる。農民たちで国民衛兵になる者は少なく、むしろ義勇兵となって前線に出るほうを選んだ¹⁵。このように、新政府は地方で大きな妨害に出会わなかった。地方は国難を前におしなべて政府への協力を惜しまぬか、あるいは反対行動を控える態度に終始したのである¹⁶。

だが、ブルボン派とオルレアン派は新政府へのライヴァル意識を剥き出しにする。九月四日革命の直後、オルレアン派は陸軍と海軍を再編成し、秘密裏にパリに派遣することを要求。この企てを危険と見たティエールはファールに事情を説明し、この軍をベルギーに派遣するよう助言した。オルレアン派の番頭格と見されていたティエールがこのような“裏切り行為”を働いたことを知ってオルレアン派は立腹した¹⁷。

そのころ、ブルボン派の領袖シャンボール伯爵はどうしていたか。長らくオーストリアに亡命中のシャンボール伯は祖国の開戦を知って、フランスと国境を接するスイスの町イヴェルドンまで来ていた（1870年8月18日）。彼は義勇兵の陣頭に立つつもりでいたようだ。しかし、いくら檄を飛ばしても祖国からの反応は鈍く、しかも配下に軍隊指揮の経験をもつ者もいなかったため、計画を断念してオーストリアに戻ってしまう。しかし、パリで革命が起きたとの知らせに「時到来り！」と思った彼は10月初め、ふたたびイヴェルドンに出て来た。今度は新聞を使って盛んに宣伝活動を展開する。「王政の復古こそが祖国の惨禍回避と領土保全のための唯一の方法なり」という。彼はプロイセン王にも、独仏のあいだを仲介したいといった趣旨の手紙を書き送ったが、王の返事は

15 Roth, *Op. cit.*, p.214.

16 Howard, Michael, *The Franco-Prussian War*, London & New York, Routledge, 1961, 512p., p. 236.

17 Roth, *Op. cit.*, p.215.

のらりくらりで具体性を欠いていた¹⁸。

このときのシャンボール伯は仲介者としては不適格だった。外交というものは本来、国内にしっかりした足場があってこそできることである。彼は将来の国家元首の候補者として有力な人物であったにちがいないが、当時はその足場がなかった。反応がさっぱりなのをみてとった伯は、国家が危急存亡の危機に瀕しているいま、徒らに内紛を掻き立てるだけのプロパガンダは自らの将来のためにならない、当面は臨時政府に協力するほうが得策である、と悟るにいたる。いまの政府はあくまで「臨時の共和主義政府」にすぎないのだから、来るべき未来に期待しよう、と¹⁹。こうして、ブルボン派の標語は「フランスは救済されうるし、パリこそフランスを救済する使命を帯びる」となった。このことはむろん、ブルボン派が野心を捨てたことを意味しない。

第2節 新政府のこだわり

国防政府は革命から生まれた政府であり、国内に向かって命令したり外国と交渉したりするとき、法律的な基礎を欠いていた。政府閣僚にはこうしたコンプレックスが最初からつきまとい、終戦までずっと引きずることになった。政府は早くも9月8日の政令で、9月28日に憲法制定議会選挙を実施すると発表。しかし、その間にパリが包囲されたため、選挙は10月16日まで延期された。この決定に特に異議を唱える党派はいなかった（パリ市民は別として）²⁰。1849年以来21年ぶりの憲法制定のための選挙を迎えるにあたり、カトリック派も共和主義者も候補者を絞り込む。

¹⁸ *Ibid.*

¹⁹ *Ibid.*

²⁰ 九月四日革命後に誕生した国防政府でセーヌ県知事と内務大臣を兼任したジュール・フェリーの証言によれば、地方の住民はそうではなかったが、パリの住民は憲法制定議会の早期招集に反対し、デモ行動を繰り返したという。Cf. *Enquête parlementaire sur le gouvernement de la Défense nationale; Dépositions des témoins*, Tome 1, 1872, p.386.

しかし、ここで各派とも 21 年前とは決定的に異なる事情に悩まされた。つまり、時まさに戦時下である。特に、外敵の占領している地域でどのようにして選挙を実施するか。そもそも敵がこの選挙をすんなり認めるとも思えないし、休戦協定を結ばないでそれを黙過するはずがないことは自明だった。だからこそ、外相ファーヴルはまず敵の出方を探るためフェリエールに出かけたのだ²¹。彼自身、休戦協定なしに選挙ができるとは考えていなかったし、交渉相手のビスマルクもそうであった。スタンで皇帝を捕虜にしまい、交渉すべき相手を失ったことで当惑していたビスマルクは、休戦協定の締結をめざす議会の招集ならば承認しようと心に決めていた。だが、両者の一致はそこまでだった。前にみたように、条件において両者の思惑違いが生じ、会見は決裂したのである²²。

局面打開の鍵は憲法制定議会選挙が握っていたし、最初はだれもそう考えていた。しかし、フェリエール会見の失敗により投票日は 10 月 16 日に延期された。延期が繰り返されると、以後は実行されるかどうかさえ危ぶまれるようになった。国全体を支配している無秩序状態のなかで、一方で戦争をおこないつつ、他方で抗戦・講和をイシューとした選挙をおこなうこと自体が非現実的だった。政府は今度は何らの決定もしなかった。その代わり、1870 年 8 月に選出されたばかりのフランス全国の市町村議会を解散し、政府が指名する議会を置くことにした。その目的は地方政界からボナパルト派を除外し、共和派を浸透させるためであり、この措置はカトリック派と王党派から見ると、共和派によるフランス全土掌握の実行使と映った。市町村がこのような措置を受ければ、やがて県レベルに波及するのは必至である。しかし、政治的色合いにおいてフランスは単色ではない。共和主義の強い地域もあれば、王党主義の強

21 *Ibid.*, pp.335-336.

22 Favre, Jules, *Gouvernement de la Défense nationale du 30 juin au 31 octobre 1870*, H. Plon, 1871, 467p., pp.153-206.

い地域もあった。また、王党派が二派に分かれていたように、共和派にも左・中・右の色合いがあった。それゆえ、選挙に拠らず政令で地方政治の色合いを決めること自体に無理がある。うまく共和派を滑り込ますことに成功したところもあれば、見事に失敗してしまうところもあった。

そもそも、一方的に命令を送りつけてくる国防政府とは何か、この政府は法的祝聖を経ていないのではないか ― こうした地方の反発には一理ある。しかし、中央と対決すべく地方がひとつにまとまるだけの力はない。そのため地方の反発は散発的なものとならざるをえない。いかなる党派、いかなるグループも、たとえそれを欲したとしても、即時和平ないし無条件講和を口に出せなかった。抗戦熱に燃えるパリの地方が異議を唱えることは敗戦を呼び込む等しいという条件のもとでパリの意向に逆らうのは實際上、難しかった。抗戦意欲に乏しい地方人に可能な抵抗は皮肉のみだった。プルターニュの州都レンヌ駅構内において9月7日、パリ行きの列車に乗り込んだ遊動隊に向かって、駅員の一人はこう叫んだ。「ベルリン行きを希望する旅行者は乗車されたい！」²³、と。

異常な混乱状態と熱気の立ち込めるなかで、いつもちぐはぐな命令と決定が相次ぐ。何はともあれ戦争だとばかり、正規兵と遊動兵の動員のために県知事は、「若者よ、召集命令に先んじて出頭されたい」と叫ぶ。かくて、愛国熱溢れる青年が集まる。しかし、どこでも服も靴も銃も不足する。ナントでは兵士たちはボロのズボンををはかされ、銃剣の鞘を受け取るためしばらく足止めを食らった。そして、ジュール県では3千の遊動兵が集まったが、1822年モデルの旧式銃が手渡された。兵士はシャスポーを要求したが、むだだった²⁴。

特に難儀を味わったのは、侵入を受けた諸県の知事である。ヴォージュ県知事はそれこそ身を粉にして立ちまわる。すなわち、新兵の身体検

²³ Roth, *Op. cit.*, p.217.

²⁴ *Ibid.*

査、遊動兵の召集が終わるとすぐに、それらにパリもしくはブザンソンから来た将校を配した。その他に義勇兵の組織化の仕事もあった。エピナル市長クリスティアン・キエネルは1870年9月25日に実兄宛てに書いている。

「われわれはプロイセン兵と対峙する前に宿营地探しと任務の重さで押し潰されそうである。義勇兵、特殊任務兵、遊動兵が次から次へと現われ、その組織化を待っている。[...] 南フランスはわれわれの苦勞を知らないようだ。」

このようにして散々苦勞して掻き集め編成した兵士の軍事的価値についてキエネルは悲観的だった。10月7日の手紙はこう述べる。すなわち、「射撃について何も知らず、臆病な遊動兵に私は信をおいていない」²⁵、と。

敵の占領地域に含まれるセヌ＝エ＝マルヌ県とセヌ＝エ＝オーーズ県に近いヨヌ県の知事は、ポール・ベールを首魁とする抵抗運動の組織を立ちあげた。抵抗軍はゲリラ活動を開始し、そのため、ケルザウン将軍指揮下のプロイセン軍はエヴルーへの移転を余儀なくされた。2ヵ月間でヨヌ県だけで56個駐屯大隊を生み出し、そのうちの歩兵5個中隊が県内での軍事行動に関与した。この中隊は県独自の力で装備を施されたのである。9月末に最初の銃撃戦に加わったが、県知事は道路上に塹壕を掘らせた²⁶。

国民衛兵の武装・軍服・装備の仕事は市町村と県の担当である。これら地方行政は公債発行と借入金で費用を捻出する。ノール県のヴァランシエンヌ、ドゥエー、ダンケルクはシャスポーの購入のため小額市債の発行を議決した。リール市は気前よく額面の大きな市債を発行し、総収入が15万フランに上った。だが、一般に公債よりも借入金による収

²⁵ Roth, *Op. cit.*, p.218.

²⁶ *Ibid.*

入の方が大きかった。実際の数値で示すと、ヨンヌ県は136万フラン、フィニステール県は60万、ロワレ県は150万、サルトゥ県は25万、ノール県は150万である²⁷。

遊動兵の戦闘能力の評価はまちまちだった。西部と中部では一般に軍隊の状況は良好で、士気は旺盛、訓練も順調で出征に堪えうる状態にあった。これと対照的に、南部はよくない。トゥーロン、マルセイユ、ペルピニャン、ディーニュ、バヨンヌの兵士はとても実戦に投入できる状態になかった²⁸。パリ地方の中東部地域（シャンパーニュ）ではどちらともいえない状況にあった。オーブ県のある村は、敵が接近してきたという理由で薬包を送り返してきた。ブルゴーニュのコート＝ドル県の中隊は戦意乏しく、和平を望んでいた。ジュール県の住民は「無気力」だった。ノール県知事ベルナル・メナジェは、兵士たちは「徹底抗戦を嫌がった」と述べる。多くの徴兵適齢者たちはなんとか兵籍登録を免れようとして、破廉恥にも兵役免除証の獲得のため奔走する…²⁹。

遊動兵がこういう状態であれば、国民衛兵については推して知るべし。動員のための徴兵調査がなされるやいなや、ここでも兵役免除をめぐり騒動が頻発した。北仏4県の軍事派遣委員に選ばれたテストランは、「各人が、国民衛兵の動員を免れようとして発揮した熱意の10分の1でもよいから熱意をもって私を支えてくれていたなら、事態はまちがいなく好転したであろうに」、(10月18日)と書く。たしかに、兵役忌避の理由は雑多である。しかし、政治的なものでないことだけは確実であり、地方諸県は一般に抗戦意欲は冷めたままであった³⁰。

地方に期待がもてないとなると、頼みは海外植民地しかないことにな

²⁷ *Ibid.* pp.218-219.

²⁸ 保守的伝統の強い西仏が強固な軍隊を、逆に、共和主義と民主主義の伝統の強い南仏が脆弱な軍隊を派遣した点に留意したい。後者において何らかの政治的理由で兵役忌避の行動があったことがわかる。

²⁹ Roth, *Op. cit.*, p.219.

³⁰ *Ibid.*

る。アルジェリアへの期待感が高まる。功名心に燃えたいく人かの將軍は、国内から送られてくるアピールに耳を傾ける用意があった。ル・フロ陸相は9月18日、エステラジー將軍（オランに駐在）に打電し、当地での徴兵と援兵派遣を要請した。この電文はパリが外部に送った電報の最後のものとなる。なぜなら、以後、パリはドイツ軍の包囲により物理的に外界から絶たれたからである。これ以降、諸県を指導するのはトゥール派遣部ということになる。

第3節 トゥール派遣部

敵の包囲網が完成すると（9月18日）、パリの行動の自由は奪われた。そのぶんトゥール派遣部に課された責務は重くなり、迅速かつ的確な判断と措置が要請されることになる。当初、ファーヴルとピカールがトゥールに赴く予定だったが、不穏な空気の漂うパリも重要という理由で両名はパリに残り、アドルフ・クレミュー他2名が派遣されることになった³¹。

派遣部の構成はアドルフ・クレミュー法務大臣、グレ＝ビゾワン、フリション海軍中將である。3人のうち、最も著名な人物は最年長のクレミュー（1796-1880年）だが、彼は愛想のよい共和派の弁護士だった。しかし、行動家というより弁舌の人であって、国家の大事を任せるにふさわしい手腕に欠けていた。残りの2人もそれぞれ好人物ではあったにしても、やや了見が狭く行動力に乏しいといった点で革命の実行指揮者として任が重すぎた。トゥールとパリの連絡は、セヌ川に敷設された電信ケーブルによりルーアン経由で確保されていたが、まもなくプロイセン軍はそれを見つけ切断してしまった³²。以後の連絡は気球と伝書鳩のみに頼ることになる。すなわち、水素ガスを詰めた気球に搭乗員が添

31 Favre, *Op.cit.*, p. 222 p.

32 ケーブル切断は独軍によるパリ包囲が完成する9月18日の直後2・3日中の出来事であった。

乗してパリを脱出するのである。積荷は書類と伝書鳩でほとんどすべてだった。パリを離れた気球は風任せでどこかの地方に降り立ち、そこから最寄りの鉄道駅から機関車でトゥールに急行するのだ。トゥール派遣部からパリへの連絡は伝書鳩が小さな手紙を運んだ³³。

トゥール派遣部にはパリから閣僚補佐としていく人か送り込まれていた。そのうち最重要人物がガンベッタの友人クレマン・ローリエで、彼は派遣部の内務大臣に任命された³⁴。さらに、ルフォールが陸軍大臣に、ショードルディが外務大臣にそれぞれ任命された。目立たないが、当時、きわめて重要な職責を帯びたのは電信局長ステーナケルである³⁵。ところが、トゥールでは彼らを迎える手はずがほとんど整っていなかった³⁶。派遣されたものの、その執務場所はおろか、住居さえ自分で探さなければならぬ始末であった。事務室はトゥールの公共建築物の一部をあてがわれ、閣議は大司教の図書館でおこなわれ³⁷。派遣部はまず協力者を探しだし、資金を調達しなければならなかった。あらゆる史料が共通して述べるところでは、どこでも目標の欠如、混沌、資金不足、紛争が支配していた。

外交団の一部もパリから引っ越してきた。英国大使リオン卿とオーストリア大使メッテルニヒはそれぞれトゥールのホテルの一室を借りて執務する。『ル・シエクル』紙主幹の著名ジャーナリストのエミール・ド・ジラルダンもパリから移ってきた³⁸。外国の通信員および請願者もトゥールの町に溢れた。パリ政府の要請により和平仲介要請のためヨー

33 松井道昭「鳩と気球―パリ籠城期（1870-71年）における郵政事情―」『おさらぎ選書』第3集、(財)大佛次郎記念会、1988年、pp.79-115。

34 Desmarest, Jacques, *La Défense nationale, 1870-1871*, Flammarion, c.1949, 478p., p.123.

35 *Ibid.*, pp.123-124.

36 Dupont, Léonce, *Tours et Bordeaux, souvenirs de la République à outrance*, E. Dentu, 1877, 424p., p. 4.

37 Desmarest, *Op. cit.*, p.124.

38 Cf. Girardin, Émile de, *Les cent jours, Tours, le 25 décembre 1870*, La Rochelle, Thoreaux et Petit, 80p.

ロッパ各国政府を歴訪するティエールもトゥールに一時滞在した。彼がトゥールに到着したのは9月20日のことである。この町は俄かに活気を帯びてきた。ホテルもカフェはどこも満員であり、夕方になると、人の集まるところはどこでも活発な議論が始まった。兵士たちも町の賑わいの一翼を担った。どこからともなく義勇兵が集まり宿泊しはじめた³⁹。

だが、町が賑わいを見せはじめても、戦時下の町に特有の熱気というものを感じられなかった。通りで行進が見られないばかりか、騒動さえもちあがらなかった。エミール・ド・ジラルダンの書く記事の論調はいつも沈鬱であった⁴⁰。

派遣部の樹立は全国に知らされたが、地方は信用しない。派遣部はいずれ瓦解を免れないであろうと考えられたのである。ガンベッタが指名した県知事たちはどこでも左右両翼の勢力に取り囲まれた。西部フランスでは王党派とカトリックが非協力にまわり、南部では左翼が自治をかざしてこれまた非協力にまわったことはすでに述べた。中部フランスの中心リヨンが政府に服従しなかった。かくて、北仏に期待がかけられたが、トゥールが北仏と連絡をつけようにも、間に敵が進出してきたため、それもしだいに困難になった。

クレミューら「三頭政治」の手詰まり状態がますます明瞭となり、危険な無政府状態が忍び寄りつつあるのを見たパリ政府は局面打開のため、ガンベッタ内相をトゥールに派遣することになった。派遣部トップの意思決定の統一をはかることが何よりも肝要であり、その役にはガンベッタ以外に適任者はいなかった⁴¹。弱冠32才の共和主義の熱血漢で、しかも稀代の雄弁家で人心収攬の術に長けた人物であり、彼に期待がかかったのは当然とも言えた。彼が気球でパリを発ったのが10月7日午後3時。気紛れな風向きにより目的地とは逆方向のモンディディエに降り

39 Dupont, *Op. cit.*, p.5.

40 Girardin, *Op. cit.*, p.6.

41 Desmarest, *Op. cit.*, p.178.

立ち、プロイセン軍の監視網をかいくぐってアミアンおよびルーアン經由でトゥールに到着したのは10月9日である。この冒険行動は、祖国の危機を耳にしたナポレオンがごく少数の従者を引き連れ急遽密かにエジプトから祖国に帰還した故事を髣髴とさせるものがある。県庁舎のバルコニーで彼が演説をはじめたとき、大群衆が拍手喝さいの嵐が起きた。彼の政敵のひとり、「人々は直ちに、演説のうまい人物に全幅の信頼を寄せ、彼を救世主と見なし、あらんかぎりの声援を送った」、と語る。新聞諸紙はその雰囲気について数多の記事を載せている⁴²。

10月10日のトゥール派遣部の政令にガンベッタの名が初めて登場し、翌11日の市町村宛ての政令は全部で3つ出た。軍編成に関する最初の政令には指揮官の任命、制服、集合、演習など、13項目にわたる細々とした指示が書かれ、2番目の政令には武器、弾薬、軍事物資の製造に関する規程が書かれている。ここから、ガンベッタに付託された使命が何であったかがわかる。11日の3番目の政令には派遣部付陸軍大臣として鉄道技師のシャルル・ド・フレシネが任命された、とある⁴³。フリション提督が陸相職の辞任を申し出たからだ。根っからの軍人であり、地方政治の足並みの揃わないことに嫌気がさしたのだ。クレミューとグレ＝ビゾワン、そして、ガンベッタも懸命に慰留につとめたが、翻意させるにいたらない。ガンベッタはその後釜にフレシネを据えた。

ここでフレシネについて特に説明をしておかねばならない。彼は派遣部で文字どおりガンベッタの右腕として大車輪の活躍を果たす重要人物である。フレシネ（1828-1923年）はエコール・ポリテクニク出の鉾山技師で、鉄道建設事業において功績があった。彼は二月革命時に共和派として政治に手を染めたことがあり、九月四日革命にも加わり、そうした経緯もあって国防政府下でタルン＝エ＝ガロンヌ県知事に任命されてい

42 Ibid., pp.178-179.

43 Ministère de la guerre, *Décrets, arrêtés et circulaires de la Délégation*, op. cit., pp.21-23.

た。軍事の素人ではあったが、持ち前の愛国心、知性、行動力、事務処理能力を遺憾なく発揮し、無から有を生み出すに等しい偉業を成し遂げた。派遣部内で陸相の任務を達成するのに必要な人材をほとんど欠いていたため、フレシネは他分野の技師とくに鉄道技師を登用した。たとえば、軍用地図がなかったので専門局を設け、1万5千枚の地図を作成して自軍に配布した。それにとどまらず、常時、敵兵の動静を知らせ、味方の作戦を容易にするため軍測量部を創設した。さらに情報局を設置し、知人の土木技師にその切りまわしを委ねた。軍の再編成については後述に譲るが、ルフォール、トゥマ、ロヴェルドのような有能な軍人と協力し、1ヵ月足らずで敵と会戦しうるだけの軍隊をつくりあげたのだ⁴⁴。

ガンベッタの華々しい登場は地方ですぐに反響が出た。彼の使命は地方で一枚岩の団結をもたらしことだったが、結果は政治的な炙り出し効果をもたらした。つまり、共和派が勢いを取り戻し、保守派の無気力を叱りつけたのは確かだが、その一方で、この戦争を負けたものと見なし、講和を唱えはじめていた王党派と保守派はガンベッタの檄を苦々しい思いで受け止めた。特にフランスの中心部でも敵兵の活動が活発化するにつれ、進むべきか退くべきかについての彼らの迷いは膨れあがる一方だった。手を焼いたのはかの「南仏同盟」である。リヨン、マルセイユ、トゥールーズでは中央権力に対するあからさまな挑戦が始まる。

リヨンではガンベッタがトゥールに到着したあたりから、事態が好転しつつあった。県知事シャルメル＝ラクールの粘り強い説得⁴⁵が功を奏し、派遣部に従おうとしなかった過激派はしだいに当初の情熱を失い、市長の資本税を課すという提案を受け入れた⁴⁶。

44 Zurlinden, général, *La guerre de 1870-1871, réflexions et souvenirs*, Hachette, 1904, 313 p., pp.256-257.

45 フリション提督が陸相辞任を思い立ったのは、シャルメル＝ラクールが自分の命令に耳を貸さず、暴動の鎮圧のために動かなかったからである。

46 Desmarest, *Op. cit.*, p. 187.

普通選挙で議会を選んでいたマルセイユの状況のほうが深刻だった。反中央権力の中心はアナーキストのエスキロス（市長）とデルベック（県知事）だったが、彼らは派遣部の権威を認めないばかりか、ガンベッタに民警の解散を要求するほどだった。しかし、ガンベッタはあらゆる分派行動を許さず、イエズス会の解散と機関紙『南部通信』の発行停止を要求し、繰り返し「法の遵守」を説く。こうして10月15日、エスキロスは辞職を願い出るにいたった。だが、トゥール派遣部が後任を誰にするか迷っている間にエスキロスが前言を翻し、ふたたびマルセイユに不穏な空気がぶり返してきた。トゥール側でもクレミュー、グレ＝ビゾワン、ローリエなどはガンベッタに地域の特殊性を考慮して妥協するよう迫ったため、こうして『南部通信』が復刊された（10月26日）。

こうして騒動はおさまるかに見えたが、おりしもメッス開城の知らせが届き、ふたたび「南部同盟」の活動が息を吹き返し、市役所にコミューンが結成された。デルベックは民警の手で知事から降ろされた。電信局が叛徒の手に落ち、マルセイユとトゥールのこれまでのやり取りを地方諸県に訴えはじめた。しかし、今度は市民が革命的コミューンを支持しない。市民は、城内平和が肝要な時期にうちつづく騒動に辟易していたのだ。こうして11月の初めにマルセイユは平穏に戻った⁴⁷。

マルセイユに隣接するヴァール県でも騒動が起きたが、県知事の断固たる措置で3人の官吏が逮捕され政府への服従が決まった。トゥールーズでも、メッス陥落のニュースが飛び込んだときひと騒動起きたが、大きな混乱に発展することなく収まった。こうしてガンベッタの勝利は明白となり、「南部同盟」と分離主義の運動は徐々に下火となっていく⁴⁸。

47 *Ibid.*, pp.188-189.

48 *Ibid.*, p.189.

第4節 再編軍の兵力

派遣部の焦眉の課題は地方で速やかに軍隊を興すことだった。派遣部は帝政最後の内閣パリカオ将軍が立案した武装計画を踏襲する。すなわち、県単位で遊動兵を組織し、これを県庁所在地に集め訓練を施すというやり方である。グレ＝ビゾワンが軍事を担当したが、もともと軍事に疎い彼のやり口は形式主義に流れ、規則を発令するのみで実効を挙げなかった。実際の責務は騎兵隊付きのルフオール将軍が担当したが、彼はヴェロニク（工兵）やトゥマ（砲兵）など有能な将軍を抜擢して兵卒の訓練指導に当たらせた。物資不足のなかで彼らは懸命に任務を遂行した⁴⁹。

9月中旬に到着したばかりの派遣部が掌握した軍隊は歩兵5個連隊、軽装歩兵3個大隊、3個懲治隊である。そのほかに、アルジェリアから本国に召喚された砲兵5個中隊と架橋・工兵数個中隊、メジエールからまわされた砲兵1個中隊、スダン戦を闘ったあとオルレアンに逃げのびた6個騎兵連隊と旧マクマオン軍のアルジェリア歩兵団の残兵がいた。これら現役軍で2万3千に達した⁵⁰。

それに4万7千の遊動兵が加わる見込みがあった⁵¹。さらに、前年の1869年に徴募された10万がいた。その練度はまちまちだが、再訓練を施したのち実戦に投入するのは可能だった。そのほかに、これから徴募すべき遊動兵がいた⁵²。だが、俄か仕立てで間に合わないのは士官で、ひとまず2,300が見込まれたが、これだけではとうてい足りない。砲兵隊と工兵隊はほとんど無きに等しい状態だった。スタンの壊滅を免れた僅かばかりの砲兵がゲルノーブル、ヴァランス、リヨンで再編された⁵³。

見込まれた兵数は次のとおりである。

49 Rousset, lieutenant-colonel, *Histoire générale de la guerre franco-allemande 1870-1871*, tome 2, 492 p., x., p.1.

50 Zurlinden, *Op. cit.*, p. 252.

51 Serreau, René, *L'Armée de la Loire*, Edition Sistem, 1970, 247 p., p.23.

52 Serreau, *Ibid.*; Zurlinden, *Op. cit.*, p. 252.

53 Rousset, *Op. cit.*, p.2.

兵種	遊動兵	現役兵	1869年徴兵の予備役	計
歩兵	14,827	8,725	76,920	100,472
騎兵	20,488	3,249	3,520	27,257
砲兵	10,306	1,286	4,000	15,592
工兵	1,805	207	—	2,012
	47,426	23,467	84,440	145,333

54

ほかにも見込まれる兵力はあった。①国民衛兵 22 万 5 千、② 1869 年徴兵の遊動軍 14 万、③ 1870 年徴兵 16 万、④義勇兵 3 万、⑤ 35 歳以下の男子で独身または子どものいない寡夫 17 万、⑥ 1865 年および 1866 年徴募の遊動兵で独身または子どものいない寡夫 1 万—合計 91 万 5 千である⁵⁵。

戦いに欠かせないのは兵士だけではない。大砲、銃、弾薬、馬具などの武具が必須である。派遣部はこれらについてほとんど無の状態から立ちあげねばならなかった。多少残っているとはいっても、それらが各地に分散しているので寄せ集めなければならない。砲身のように 300 個砲兵中隊を満足させるだけのものが軍倉庫に眠っていたとしても、それだけで足りるはずもない。砲架と弾薬運搬車が足りないのだ。軍馬、馬具、車両、制服、軍靴、背囊、その他装備も不足した⁵⁶。何より大切なのは銃である。シャスポーの弾薬とその撃針はもともとパリで製造していたが、ここからの供給が見込めなくなったため、どこか他の場所で製造しなければならない。開戦時におよそ 1 億発の弾薬があったが、そのほとんどをパリ、メッス、ストラスブールの籠城軍がおさえていた。派遣部が 9 月 17 日の時点で掌握したところ、在庫は 2 百万発にしかない。シャスポーの薬莢は複雑な構造をもち、どこでも製造できるわけではない。撃針はトゥールーズの軍倉庫で 2 万挺分が見つかった。だが、それ

54 *Ibid.*, p.3.55 *Ibid.*56 *Ibid.*

だけでは足りない。撃針の製法も同じくきわめて複雑である。しかし、なしですますわけにもいかないため、ブレスト、ロシュフォール、トゥーロンなどの軍港の兵器廠が動員され、さらに、大急ぎでフランス中部または南西部に臨時工場が設置された。そのほか民間業者とも契約を結んで軍需品の供給を促した。かくて、月産2万挺、3百万発の量産体制が予定された⁵⁷。海軍兵器廠、サン＝テチェンヌ、テュル、シャテルローの武器工場だけで需要を賄いきれなかった。

そこで、派遣部は英国、合衆国、ベルギーなどから供給を受けることに決めた。これが戦後になって「ガンベッタ独裁」として政治問題に発展するのである。特に合衆国は南北戦争の終結を迎え、多大な軍事余剰物資をかかえていたのと、戦後復興のために多額の資金を要したため、フランスの要求に対し、渡りに舟とばかり即座に応じた。ブレスト港とル・アーヴル港へはレミントン銃が大量に荷揚げされた。状況の取りあわせとはいえ、これは思わぬ収穫だった。

民政当局と軍当局のあいだの権限をめぐる摩擦・紛争がしょっちゅうで、公的な一覧表が欠けているため、トゥール派遣部の手でいったいどれだけの軍備がなされたかははっきりしない。ルッセ中將の算定によれば、派遣部が1870年10月10日から翌年2月2日までに投入できた兵力を数字で示すと、兵員50万（12個軍団）、大砲1,400門、銃150万丁、銃弾8億7,400万発、軍馬41,758頭となっている⁵⁸。

遊動歩兵は地域ごとに3軍に組織されることになった。すなわち、東部軍（別名ヴォージュ軍）、西部軍、ロワール軍がこれらである。10月初旬の時点で各軍が揃えた兵数はそれぞれ約1万、1万、3万ずつである。連絡がとれず当初計画から漏れていた北部軍は10月になって組織化が始まった。

57 Rousset, *Ibid.*; Serreau, *Op. cit.*, p.23.

58 Rousset, *Ibid.*, p.4.

東部軍は名前こそ立派だが、雑多な兵士の寄せ集めにすぎない。すなわち、残存兵、遊動兵大隊、義勇兵、狙撃兵から成る混成軍はフランス東部の小都エピナル、ラングル、ブザンソンで編成されることになった。その中核はベルフォール要塞の籠城軍である。司令官はスダン戦を経験したカンブリエル將軍だが、彼は頭の傷が癒えない身で指揮にあたることになった。彼がベルフォールに着任したのは9月30日。城塞とそれを警護する外部要塞を守るのは1万ないし1万2千の遊動兵である。この兵隊はオ＝ラン、オート＝ソーヌ、ソーヌ＝エ＝ロワール、ローヌ、オート＝ガロンヌの5県から召集された⁵⁹。ローヌ県出身の若者パスカル・ヴィクトリオンは9月18日にベルフォールに到着。その当時の印象について彼はこう述べる。

「寒い、気候がどれほど違っていることか！ わが分隊は厩舎に借り住まいした。最初の晩は悪臭のする、腐った藁の上に寝た。 […] 駅から城塞まで、あらゆる種類の服をごたませに着た人並みでゴった返していた。」⁶⁰

遊動兵は制服もなければ、テントも毛布ももたなかった。旧式銃が支給された。数日たつと、ヴィクトリオンの所属する分隊はペルシュ要塞に派遣された。そこは、城塞から1キロメートルほど離れた小高い円丘の頂上にあった。兵士はテントを支給されたが、毛布はわずか25枚しかない。分隊が受け取ったのは標的射撃用のスニーデル Snyder 銃である。毎日2時間の演習があり、それが終わると、他にやることのない兵士たちは居酒屋に直行するのがつねだった⁶¹。のんびりした情景だが、ときおり現われる逃亡兵と避難民が彼らに、今まさに戦時下であることを思い出させた。

東部軍は10月6日にブルゴンスでヴェルダー將軍率いる独軍との戦い

59 Zurlinden, *Op. cit.*, p. 254.

60 Roth, *Op. cit.*, p.222.

61 *Ibid.*, p.223.

に敗れ、ランベルヴィリエへ、次いでエピナルへ、さらにブリュイエールへ退却する。ここまで退いても敵の圧力に抗しがたく、ブザンソンにまで退く⁶²。

西部軍は、予備役のフィエレック將軍の指揮下においてル・マンで編成された。召集範囲は近隣7県。フィエレック將軍は現役をつとめるにはあまりに年老いていたので、まもなくオーレル・ド・パラディーヌ將軍に交代する。后者はアルジェリア遠征とクリミア戦争で功績を挙げたことがある。同將軍がトゥールに到着したのは10月1日。あまりに即興的な編成、無知、資源不足ぶりを見て彼は愕然とする。それに持ち前のペシミズムが追い討ちをかける。彼がつづいてル・マンを視察したとき、状態はもっと悪かった。ほとんど何もない状態だった。現役軍ゼロ、砲兵隊もない、騎兵隊もない、遊動兵が僅かばかりいるだけである。シャルトルから3千人、パシー＝シュル＝ユールとヴェルノンから4千人を掻き集めたにすぎなかった。要するに、まともなかたちで独軍とわたりあえる軍隊は皆無だったのである⁶³。だが、幸いなことに時間はあった。つまり、独軍がパリ以西を重視しなかったため敵兵との遭遇はなく、戦闘は翌年まで持ち越されたのだ。

ロワール軍が軍隊らしい軍隊に最も近かった。これはル・フロ陸相の構想だが、派遣部のルフオール將軍が実質的な組織者であった。オルレアン、ブルジュ、ネヴェール、ヴィエルゾンの近辺から召集された数個の歩兵連隊、アルジェリア兵、遊動兵、ドイツ護送中に逃亡した兵などで構成された軍がこれだ。司令官には当年68歳になる予備役のラ・モット＝ルージュ將軍が任命された。トゥールで2個軍団すなわち第15軍団と第16軍団が付加された。その中核は外人部隊、4個アルジェリア歩兵連隊と同狙撃兵から成っていた。こうした常備軍に、国民衛兵の諸

62 Zurlinden, *Op. cit.*, pp.254-255.

63 Roth, *Op. cit.*, p.223.

大隊と駐屯地で新たに編成された連隊とが加わった⁶⁴。ロワール軍のばあいも士官が決定的に不足した。アフリカ駐留軍から将校団の一部を本国帰還させたり（そのなかにシャンジエール将軍がいる）、退役士官を復役させたりして急場を凌いだ。

ロワール軍の司令官はド・パリエールに代わった（9月23日）。彼はその日の日記に「軍は最低の状態」と記している⁶⁵。同じく日誌を残している兵卒ヴェドリーヌの味わった困苦は象徴的である。彼の所属する軍隊は9月16日にパリを出発した。ル・マン、トゥールを経て任地ブルジュに到着したのは20日。中隊は途中、屠殺場、豚小屋、牛小屋で寝泊まりしながら、オルレ안의北方に出た。そこでは森の縁で野営した。秋の太陽は陽射しが強く暑かった。食糧をもたないので、農家から買入れたり、畑地のジャガイモを引き抜いたりして調達した。ときどき彼らは、孤立したドイツ軍偵察兵と銃火を交えた⁶⁶。

会戦らしい会戦を最初に味わった（10月10日）のがこのロワール軍である。第15軍団はオルレアンとアルトネーに駐留した。それらはパリまでは百キロメートルしかない戦略的要衝であった。独軍のうちフォン・デア・タン将軍指揮下のバイエルン軍団がアルトネーを急襲したため、オルレアンに後退したロワール軍はここで激しく抵抗し、敵軍に900の損失を与えたが、自軍も損失と疲労が激しかったため、ロワールを渡って南方に退却。かくて、オルレアンが敵の手に落ちた⁶⁷。この経緯については第2節—2で述べることにしたい。

北仏4県は派遣部政府に協力的な地域であったが、そこでも困難がないわけではなかった。戦場または敵兵の潜む地域を挟んでトゥールと通信を維持するのに難があった。9月25日、共和国から派遣された委員テ

64 *Ibid.*

65 *Ibid.*, pp.223-224.

66 *Ibid.*, p.224.

67 Zurlinden, *Op. cit.*, p.254.

ストランがアミアンで国防を組織していた。つまり、この町が北部軍の挙兵の根拠地である。しかし、この地域はかつてパリ防衛を優先させたため、動員対象となる若者はほとんど出はらっている地域で、少しばかりの敗残兵がいるだけだった。そのうえ司令官に戦意乏しく、更迭が要請されていた。気球で降り立ったガンベッタがアミアンにたち寄ったとき、テストランは司令官の更迭を要請した。ガンベッタはそれを快諾し、後任を派遣することを約束したが、トゥール到着後は仕事に忙殺され、この約束を失念してしまった。落胆のあまりテストランは辞職してしまう。ガンベッタはテストランに謝罪し、翻意を促すと同時に、新司令官にブルバキ將軍—奇妙な密命を帯びてメッスを抜け出した「かの將軍」——を派遣した⁶⁸。

だが、バゼーヌ軍の副官という前歴をもつブルバキはここでは歓迎されなかった。彼は皇帝軍の参謀部付き将官であったことから、スタンでフランスを裏切った皇帝軍の生き証人として不審の眼で見られたのだ。ブルバキ自身は廉直で人品においてまったく劣るところはない。だからこそ、ロンドンで特命を果たせなかった無念を晴らすために、敢えて共和政府のもとに仕官したのだった。政治的緊張の激しいときひとたび植えつけられ偏見というものはなかなか払い落せるものではない。トゥール政府の信任と後押しにもかかわらず、ブルバキは最後まで疑いを払拭することができなかった。その結果が北部軍の不完全な編成に連なっていく。つまり、動員は思うようにいかず、装備の点でも手拔かりが多く、軍への将校配置も十分に進まなかったのである⁶⁹。

もうひとつの重要な兵力源は志願兵であった。これに関する規程を定めた1868年の法律は制服、武器、装備一般の調達を兵士が自弁しなければならないとしていた。開戦前にいくつかの中隊が編成されており、

68 Roth, *Op. cit.*, pp.240-241.

69 *Ibid.*, p.241.

そのなかのひとつに、メッス攻防戦で活躍したフルアール軍団がいた。8月中にパリで新たな志願兵部隊が組織された。パリ出身のこの志願兵は東部戦線に送られ、のちにヴォージュ軍に加わる。そのひとつ、アルザス人のみから成る「アルザス志願兵中隊」は陸軍中佐アルフレッド・ブロンを指揮官としてロレーヌ戦線に参戦する。ブロンはここで負傷し、一旦パリに戻った。快復すると、すぐにふたたび軍に入り、9月末のベルフォール周辺の戦闘に加わり、次いでヴォージュで戦った。ラングルで敗退し、ガリバルディ軍と合流するにいたる。パリで募られた志願兵はここに残るものもいれば、「アルザス志願兵中隊」の例に示されるように、地方に派遣されるものもいた。大多数はパリの西方へ派遣された。9月から10月にかけて組織編成がおこなわれたが、その正確な数は戦後になって細かな調査が実施されるまでわからなかった。パリだけで百個以上の中隊が組織された。志願兵は徴募の郷土別の中隊単位で編成され、その呼称には必ず地域の名が被せられる。中隊の規模は50人から100人のあいだである。志願兵は徴兵とは異なり、文字どおり祖国防衛の熱情に燃える者の集まりであり、戦場でいつも勇猛果敢は働きぶりを示した⁷⁰。

ノルマンディーからパリ盆地までは敵の占領地区はなく、パリへの補給路を絶つためにプロイセンとバイエルンの騎兵が哨戒しているだけだった。そこで、9月末から10月初にかけて数多の斥候兵と志願兵のグループが組織された。中心はエルブーフ、ブルトゥイユ、エヴルー、ヴェルヌイユ、リュゲル、レ・アンドゥリス、ラ・フェルテ＝ベルナールなどである⁷¹。彼らは遊動兵と混ぜ合わされ、主に、孤立した敵を襲うゲリラ戦に投入された。たとえば、セヌ＝エ＝オワーズの志願兵中隊はヴェクサン地方のマントゥとマニーのあいだで活動した。マントゥには

70 *Ibid.*, p.225.

71 *Ibid.*

9月23日以来、ドイツ軍守備隊が置かれていた。しかし、ゲリラ活動は困難を極めた。なぜというに、ドイツ軍の報復行為を怖れる市町村長とその住民はゲリラとの関わりあいを嫌い、便宜を与えなかったからである。ノルマンディーでは抵抗精神が薄く、ガンベッタの檄もほとんど反響を呼ばなかった。概してフランスの地方は恐怖感情に支配され、早期和平を望んでいた⁷²。

志願兵のなかで最も戦意旺盛だったのは共和主義を信奉する部隊である。この軍隊は制服、名称、宣言でもってすぐにそれとわかった。たとえば、「アルジェ決死中隊」、「ボージョレ孤児部隊」、「ブリダ平等大隊」…等々。その大多数はのちに、ガリバルディが指揮するヴォージュ軍に編入される⁷³。

志願兵を多数集めた地域はアルゴンヌ地方とノール県の境界地域である。近くに要塞都市メジエールがあり、この要塞と連携すれば効果的な活動が見込まれた⁷⁴。ここがパリから遠く、かつ中立国ベルギーの国境に近いところに位置するため、ドイツ軍はときおり哨戒をおこなう程度の警備体制しか敷いていなかった。メジエールを中心にアルデンヌ破壊中隊、猪中隊、アルデンヌ偵察中隊が抵抗運動を開始する。志願兵は敵の分遣隊を襲い、逆襲に遭うとメジエール要塞に逃げ込んだ。そのほか、アルゴンヌ狙撃兵とベルギー人義勇兵についても言及しておかねばならない。ラングル要塞都市の周囲でも志願兵中隊が組織され、ロレーヌやシャンパーニュにまで遠征した⁷⁵。

義勇兵の出没に、すなわち軍服を着用せず民間人を装う者がとつぜん味方の手薄なところ、あるいは孤立した斥候兵を襲うゲリラ活動にドイツ軍はかなり手を焼いた。モルトケは彼らを即決裁判で極刑に処すよう

⁷² *Ibid.*

⁷³ *Ibid.*

⁷⁴ *Ibid.*, p.226.

⁷⁵ *Ibid.*

命令した。もし村落が身元不明の容疑者を匿ったばあい、村落も謀反の企てありと見なし、それに報復措置を講じるべしとした（9月27日）。志願兵はすべてフランス政府当局が把握しコントロールしていたわけではなく、民間人の単独行動もあり、その数が幾らで成果がどれほどだったかを見積もるのは容易ではない。効果は実際面よりも、敵に対する心理的な脅威の面が大きかったかもしれない。9月と10月における特に東部フランスとパリ盆地における義勇兵の散発的行動は、そこが必ずしも安全ではないというほどの脅威しか与えなかった⁷⁶。10月初旬においては東部もロワール周辺部のいずれにおいても軍隊の名に値する軍隊はまだ編成されていなかった。

作家フローベルは10月11日、その当時の悲観的な見通しをこう述べている。

「プロイセン軍は今やルーアンから12時間のところまで来ている。一方、わが軍はというと、秩序も命令も訓練も何もかもない。いつもロワール軍でもって騙されている。それはどこにいるのだ？ どんな代ものかご存じだろうか？ フランスの中央部で何をしているのだ？

パリは餓死してしまうだろう。救援にかけつける者はいない。共和政の軽拳は帝政のそれよりもひどいのだ。」⁷⁷

第2章 ストラスブールとオルレアンの陥落

第2節 ストラスブール

9月27日、1ヵ月半に及ぶ籠城を続けていたストラスブールがついに陥落。このアルザス州都の開城は独仏双方に大きな心理的影響を与えた。

⁷⁶ Ibid.

⁷⁷ Ibid.

メッスほどの大軍がいたわけではなかったが、そこに仏軍が駐留しているというだけで独軍はいつも通信線への脅威を感じていたし、パリとメッスに、そして、フランスの地方にいつも励みを与えていたのである。このように、この町の動静は少なからぬ関心を集めていたが、比較的早い時期に陥落してしまったのだ。なぜなのか。

ストラスブールには南ドイツ諸国の軍隊の侵入に備え、ウーリック將軍指揮下に兵力1万余の守備隊が置かれていた。8月初旬のアルザスでの戦闘は前にみたように、北の国境付近で始まり、ストラスブールは直接的戦闘から取り残されることになった。仏軍がフレッシュウィレルで破れ、ロレースに潰走したため、ドイツ第3軍のうちバーデン軍が本隊から分かれ、ストラスブールを包囲した(8月9日)。その主たる目的は、攻略は二の次で、当面はこの町が軍事行動に出ぬよう釘づけ状態にすることだった。その間にフレッシュウィレルから仏軍退却兵や義勇兵がストラスブールに集まったため、総兵力は1万7千ほどになっていた。近隣の農民たちも戦火を逃れるため、馬車に家具・食糧・飼料を山と積んでこの町に繰り込んできた⁷⁸。8月中は包囲軍の攻撃は大したことはなかったが、スタンで仏軍主力が潰滅する(9月1日)と、ストラスブールへの鉄と火の締めつけも活発化していく⁷⁹。

パリの革命を知ってこの町も共和政を宣言し、ボナパルト派を行政と軍から追放した。かくて弁護士エミール・キュスが市長に就任した(9月12日)。それから数日後、ガンベッタがバ＝ラン県知事としてエドモン＝ヴァランタンを任命した。新知事は命がけで任地に赴く。夜陰に紛れ独軍包囲網を突破し、最後は堀を泳ぎわたって町に辿り着いたのである⁸⁰。

78 Chuquet, Arthur, *La Guerre, 1870-71*, Plon, 366 p., p.175.

79 Rousset, *Op. cit.*, pp.424-425.

80 Roth, *Op. cit.*, p.227.

この町のようなメッスの場合とはかなり異なっていた。つまり、ストラスブールは政治的に共和主義でまつまっていたが、軍事的には遥かに劣悪状態にあった。9月も半ばを過ぎると、籠城軍の劣勢ぶりははっきり表面化する。籠城軍はメッスほどの兵力をもたなかった（10分の1）ため、町の城壁外に大きく張り出したかたちの防御陣地を築けなかった。そこで、寡少兵力に見合った戦法として防御戦術が採られることになった。この城砦都市の致命的な点は外堡がなかったことである。城壁を盾にして守るにはストラスブールはあまりに小さな町であり、防御軍は町のどこにいても、城壁のすぐ近くにまで接近する独軍の大砲の射程距離内に入ってしまう。民間人の存在が心配されたが、スイス政府の仲介で、民間人は町の外に退去することが認められた（9月11日）⁸¹。

9月12日以来、ストラスブールの町は西北方から猛烈な砲撃を浴び、瓦礫の山を築いていく⁸²。戦後になってドイツ軍参謀本部戦史課が作成した作戦図を見ると、ストラスブールの北西方に4キロメートルに及ぶ独軍塹壕線が張られ（深いところでは三重の塹壕線）、独軍が町の北西端の張り出し要塞をめざしジグザグ状に前進しつつあることが読み取れる。町の南は深い森、東はライン川へ通じる運河であり、守備隊にとって逃げ場はない。おまけにライン川対岸のケールにもストラスブールに向けて砲列が敷かれている。ケールから街の中心部まで約3キロメートルで、とうぜん射程距離内に入る。地図に書かれた等高線は郊外も街中もともに137～144メートルで、ほとんど平坦であること、つまり、この要塞都市が完全な平城であったことを示している⁸³。

81 Rousset, *Op. cit.*, pp.428.; Maquest, Pierre, *La France et l'Europe, pendant le siège de Paris, 18 septembre 1870-28 janvier 1871, encyclopédie politique militaire et anecdotique*, 2e éd., Paris, Auguste Ghio, 1877, xii, 838 p., pp. 29-30. 2500人の児童、婦女子、老人が廃墟を後にした。

82 Rousset, *Ibid.*, pp.426-428.

83 Section historique du la Grand Etat-Major Prussien, *Guerre franco-allemande de 1870-1871, Plan du siège de Strasbourg*.

砲撃でフォブール、歴史的記念物、兵舎、兵器廠、劇場、図書館、県庁舎などが次々と崩壊した。やがて、前進してきた敵により張出城砦が破られ、次いで城壁の一部に裂け目を生じ、一斉突撃が可能な状態になった。市民に動揺がひろがり⁸⁴、9月27日、ウーリック総督は市当局の了解を得て開城することを決断。同日、大聖堂の天辺に白旗が掲げられた。翌28日、降伏文書が交わされた。こうして守備隊に2,500の死傷者を出して戦闘は終わった⁸⁵。

ストラスブールの籠城戦は50日間続いたが、そのうち後半39日間は連続砲撃を浴びた。500人の将校と1万7千人の兵卒が捕虜となり、ライン川を越えて護送された。ウーリックをはじめ上級将校がその勇猛果敢な戦いぶりに敬意を表され、今後、敵対行動を慎むことを条件に釈放された。市内に残留した民間人のうち200人が死亡、3,000人が負傷、1万人が住居を失った⁸⁶。

9月28日夕方からバーデン軍の市内進駐が始まる。進駐軍は民間住宅に分宿することになった。翌日、アグノーで待機中のドイツの行政官がストラスブールに到着し、このアルザス州都がドイツ領に編入されたことを宣言した。ライン川の対岸のバーデンからは廢墟見物に訪れる者さえ現われた。それを見た市民がきわめて冷淡だったのはいうまでもない⁸⁷。

ストラスブール落城は政治と軍事の二重の意味をもっていた。のちのアルザスの運命を考えると、政治的意味のほうが大きい。ストラスブール開城とアルザスのドイツ編入が伝えられるやいなや、ドイツ世論は沸きに沸いた。アルザスのドイツへの復帰は、同州がルイ十四世治世下

84 開城降伏を最初に唱えたのは市民のほうだった。市当局は9月18日にウーリックに敵と和平交渉するよう要求している。Girard, A et F. Dumas, *Histoire de la guerre de 1870-71*, Larousse, s.d., 143 p., p.53.

85 Rousset, *Op. cit.*, p.428.

86 Roth, *Op. cit.*, p.227.

87 *Ibid.*

でフランスに編入されて（1683年）以来、実に200年ぶりのことである。フェリエール会見時において、まだ抗戦中のストラスブールを差しおいてビスマルクはこの町を（ドイツの）「家の鍵」と主張し、割譲を主張した。プロイセン宰相のこの強弁はアルザス人の愛国心を刺激し、激しい憤激を巻き起こした⁸⁸。それまではアルザスはドイツなのか、それともフランスなのかははっきりしなかった。むしろ、アルザスはアルザスであっていずれのものでもないとの感情にとらわれていたが、独仏の政治的駆け引きの材料となって住民の意思と無関係に譲渡されてしまっただけというものの、アルザス人の心中にフランス的アイデンティティが急速に膨れあがっていく。それまではほとんどのアルザス人が口にしたことのない、「マルセイユーズ」が初めて愛唱されるようになったのである⁸⁹。

次に、ストラスブール攻略の軍事的意味を確かめよう。その第一はモルトケ作戦の優越性をものの見事に示したことである。ヴォーバン式要塞はどんなに堅固に構築されたものであっても砲撃には脆いという事実を証明した。以後、この戦法に自信をもった独軍は、包囲＝籠城戦のおこなわれるいずれの場所でも似たような攻略法を採る。第二に、この戦略上の要衝を奪取したことは独軍にパリ包囲軍への軍事補給を確保することになった。第三に、フォン・ヴェルダー將軍麾下の4万のバーデン＝バイエルン連合軍を包囲戦から解放した。モルトケはこの軍に、ラングルで編成中のフランス東部軍（ヴォージュ軍）の掃討という新たな任務を与えた。ヴェルダー將軍はバーデン兵の増強を受け取ると、すぐに軍を二つに分けてヴォージュ県とアルザス南部に向かわせた⁹⁰。

アルザス南部つまりオ＝ラン県の諸都市は次々と陥落していく。ミュールーズは10月3日、コルマルは8日、セレスト要塞は24日、ヌフ

88 *Ibid.*, pp.227-228.

89 *Ibid.*, p.228.; ピエール・ノラ（谷川稔監訳）『記憶の場、岩波書店、第1巻, pp. 458-460.

90 Roth, *Ibid.*

＝ブリザック要塞もまもなく同じ道を辿る。アルトキルシュ峡谷とベルフォール隘路の北側において散発的な戦闘が生じた⁹¹。

ヴォージュの戦いは10月12日のエピナルの陥落でひとまず終わりを告げるが、ここにいたるまでの戦いの経過は省略することにしよう。独仏正規軍同士の衝突においてさえ、大砲の火力において勝る独軍に一日の長があるというのに、残兵と俄か仕立ての遊動兵で立ち向かうことには相当の無理があった。もし抵抗側に万に一つの確率で勝機があったとすれば、ゲリラ戦に徹することであっただろう。しかし、そのためには、鉄の意志と機動性を有する正規軍の存在が絶対的な必要条件であり、かつまた住民の支持が必須であった。仏軍に鉄の意志がなかったとまではいわないが、大革命の思い出にしがみつき、自負心のみに溺れ、正攻法に頼ろうとする仏軍にゲリラ戦に徹する用意はなかったし、厭戦気分沈みがちな住民はゲリラ戦を支えようとの意欲を欠いていた。10月半ばまで仏軍がもち堪えたというのは、むしろ善戦したというべきであろう。独軍が敵の掃討に手こずったのは秋の気候、とくに山間部に特有の霧のためである。

筆者の手許にベルギー人ピエール・マケという人物が記した『パリ包囲期におけるフランスとヨーロッパ』と題するコメンタール付きの日誌がある。これは戦後1873年になって出版されたものだが、彼が中立国ベルギーにいて両交戦国の諸新聞はむろん、ヨーロッパ中の新聞を毎日収集し、その記事に関し自身のコメントを記したものである。その10月2日の日誌に「フランス北・西部の要塞の状態」と題する一覧表が掲げられている。少々長いが、注目すべき記述であるので以下に引用しておこう。

「ストラスブールの陥落以来、北部および西部のフランスの要塞が被った状況を以下に記す。ストラスブール、トゥール、ブティト

91 *Ibid.*, 229.

＝ピエール、エヒテンベルクは籠城期間に長短の差はあるが開城。ウィサンブールも猛撃の末に落城。アルサル、スダン、ラン、ヴィトリ＝フランセは短期の抵抗の末に陥落。陥落城砦の計は9城。今なお14の要塞が抵抗中。すなわち、ファールスブール、メジエール、ティオンヴィル、ビッチュ、モンメディは籠城中。ヴェルダン、シュレシュタット、ヌフブリザック、ロンウィー、ソワッソン、カリニャンは包囲が始まったばかりで、ベルフォールは自由である。』⁹²

第2節 ヴェルダン、ビッチュ、ベルフォール

ストラスブールとメッスの開城はフランス東北国境近辺の他の要塞を窮地に陥れた。独軍にとってパリへの途中にあるこれらの要塞を速やかに“除去”する必要があった。なかでも、パリに向かう幹線鉄道の沿線にあたるトゥール Toul、ソワッソン、ヴェルダンが重要だった。これらの要塞都市は、今度の戦争において宣戦布告があまりに唐突であったため、ほとんど戦闘準備がなされないままに籠城戦に突入せざるをえなかった。

ナンシー西方20キロメートルに位置するトゥールは鉄路にせよ道路にせよ、ドイツからパリへの連絡路の途中に位置していた。ここが敵の手中にあるかぎり、独軍にとって直接的な障害となるのは避けられない。独軍は緒戦で勝利をおさめるやいなや、この町を包囲するにいたった(8月14日)。ムルト県で召集された遊動軍がこの小都の防衛にあたっていたが、敵の激しい砲撃に6週間もち堪えたのち武器をおいた(9月23日)⁹³。

ソワッソンもトゥールに劣らぬ小さな要塞都市であり、スダンの戦いのち包囲された。同市も似たり寄ったりの無防備状態におかれていた

⁹² Maquest, *Op. cit.*, p.44.

⁹³ Girard, A et F. Dumas, *Histoire de la guerre de 1870-71*, Larousse, s.d., 143 p., p.55.

が、守備にあたる国民衛兵が神出鬼没の出撃戦を駆使することによって、敵が包囲陣地を構築しようという企てを妨害した。しかし、近隣の丘上に布陣した砲兵隊の猛攻を受け、37日間の籠城ののち降伏した（10月15日）⁹⁴。

ムーズ河畔の町ヴェルダンとは異なり、長期に亘り遥かに頑強に抵抗した。ヴェルダンは第一次世界大戦において難攻不落の要塞として盛名を馳せることになるが、それは普仏戦争後に強化されたため難攻不落となったのであり、普仏戦争時にはまだ要塞化は不完全だった。それにしても、ここの防備施設は当時、他の町と比べて格段に優れており、備蓄糧食も豊富で、しかも総督ゲラン・ドゥ・ワルダーバック将軍は精力的で機略に富む軍師だった。ヴェルダンは8月24日以来ザクセン軍による攻撃を受けはじめ、数度の勧告にもかかわらず降伏を拒否しつづけた。10月中旬には連続54時間に及ぶ砲撃を受けたが、それでももち堪え、同月26日には逆に出撃戦を仕かけ、包囲軍の砲台を沈黙させるほどの戦果を挙げた。しかし、その直後にメッスが落城すると、ここを包囲していたプロイセン軍の一部が増援軍としてヴェルダンに差し向けられた。かくて包囲は完璧となり、規則的な砲撃を受けるようになると、さすがのゲラン将軍の心も開城に傾いていく。守備隊の勇猛果敢な防御に鑑みて独軍側が同将軍に提示した開城条件は破格である。この町には軍税・徴発はいっさい免除し、ここに備蓄されていた軍用物資と食糧はフランスに引き渡すとされた⁹⁵。

ランLaon の場合は悲劇的だった。古代ローマ時代に高地に築かれた要塞が周囲を睥睨していたが、防備施設は脆弱で守備隊は少なく、とうてい防御するに堪えない状態にあった。9月9日、ここを包囲したメクレンブルク大公軍による最初の開城勧告に対し、町民がひどく動揺した

94 *Ibid.*, pp.55-56.

95 *Ibid.*, p.56.

ため、要塞司令官は無血開城する決断をした。かくて軍楽隊を先頭に独軍が街中に進駐してきた。城明け渡しの細部について協議するため、大公と補佐の将軍が丘に登ってきたとき、あまりに不甲斐ない展開に怒り狂ったアンリオという老兵がとつぜん火薬庫に火を放った。大音響とともに要塞全体が吹き飛んだ。敵味方合わせて460人が斃れたが、うち100人がドイツ兵だった。大公自身も足に重傷を負った⁹⁶。

シュールシュタット、ヌフ＝ブリザック、ティオンヴィル、ラ・フェールなど小さな町はほとんど問題にならない。それらはほとんど抵抗態勢をとる余裕もないうちに攻撃を受け、それぞれ10月24日、11月10日、同22日、同26日に敵の軍門に降った⁹⁷。

ビッチュは例外中の例外である。その要塞はヴォージュ山脈北辺の山間に位置し、丘を背にした天然の要害で、8月7日から翌年3月27日までの実に7ヵ月半、テシエ大佐の指揮下で軍・民協力しあってあらゆる攻撃に堪えた。砲撃もさることながら、防衛者を苦しめたのは疫病である。ついに食糧が尽きたため、守備隊は敵の監視の眼をかいぐり武器と荷物を持って脱出に成功した。

要塞防衛での最大の英雄譚はベルフォール攻防戦である。ベルフォールはアルザス南端の工業都市ミュールーズに近く、道路と鉄道で西南ドイツとスイスに通じていた。その意味でも戦略上の要衝である。当時の町は人口6,500ほどで、機械の生産で名が通っていたが、それより重要なのは、ここの丘上の要塞施設である。1865年に手直しされ、ベルヴェとペルシュの外堡が築かれた。この補強工事がのちの攻防戦でモノをいうのである。鉄道駅から1キロメートルほど離れた小高い丘の上に要塞を認めることができる。つまり、要塞は街中から外れたところに位置する。丘全体と要塞施設内部は現在、普仏戦争の英雄的な戦いを記念する

96 *Ibid.*, pp.56-59. 筆者はランを訪れたことがある。釣鐘をひっくり返したような山で、途中は急坂となっており、防御にもってこいの地形をなしている。

97 *Ibid.*, p.57.

戦争博物館となっている。

ベルフォールが普仏戦争で包囲を受けるのは遅れた。独軍にとって敵の崩壊があまりに早く、自軍先鋒は9月中旬にはパリ包囲を完成してしまふほどであったため、アルザス南端の要塞都市は守備隊を釘づけ状態にしておくだけで事足りた。地方での再軍備が軌道に乗りはじめ、同じころメッスが落城してから、独軍首脳部によりやくこの軍邑の存在が気になりはじめたのである。

籠城軍1万5千、包囲軍4万だった。要塞司令官はダンフェール＝ロシュロー大佐であったが、彼は包囲までのかなりの時間を利用し、補強工事、軍備、食糧の備蓄において万全を期した。さすが知将といわれるだけのことはあり、彼は籠城一辺倒といった単純策は採らなかった。時おり、守備隊に出撃を命じて包囲軍に脅威を与え、攻撃陣地の構築工事を妨害した。外堡を効果的に使い、かつ不時の出撃により敵兵の要塞への接近を妨げた。戦後にプロイセン参謀本部戦史課が作成した作戦図を見ればすぐわかることだが、包囲陣地の構築が未完成のまま独軍が南方からジグザグ状態で塹壕を掘り進んでいくようすが描かれている。頑強な抵抗に手こずり、怒り心頭に達した包囲軍司令官トレスコフ將軍は矛先を転じ、街中への砲撃を命じた⁹⁸。12月3日に始まるこの砲撃は73日間も続く。ベルフォールに撃ち込まれた砲弾数は9万8千発にのぼるが、うち4万発は街中へのものである。ストラスブルと違い、ベルフォールは要塞と街は別々だが、それにもかかわらず無差別の砲撃によって街は灰燼に帰した。それは未来の戦いの予兆となった。

ブルバキ軍が接近しつつあるという報（後述）に敵味方ともに色めきたったが、やがてそうした危険が遠のくと、プロイセン軍は1月26日から総力を挙げてベルシュ角面堡の奪取にとりかかる。度重なる砲撃によ

98 *Ibid.*, p.58.; Section historique du Grand Etat-Major Prussien, Plan du siège de Belfort depuis le commencement de l'attaque régulière jusqu'à la reddition de la place le 18 février 1871.

りペルシュはほとんど原状をとどめない残骸と化したため、守備隊はついに2月8日に本要塞に引き揚げた。かくて、この高台の奪取に成功したプロイセン軍は97門の砲列を敷いて街と要塞に対して砲弾の雨を降らす。砲撃が再開されたのは2月13日で、ちょうど独仏の休戦協定の適用範囲が東部にまで拡大された日にあたる。それを知らないダンフェール將軍は自国政府からの停戦命令を受け取るまで抵抗を続けた。彼が停戦に同意したのは2月18日のことである⁹⁹。

ベルフォールの英雄的な戦いの栄誉を称え、来るべき講和条約でベルフォールはアルザスから外され、独立の県「ベルフォール領土 Territoire de Belfort」としてフランスにとどめおかれることになった。ダンフェール＝ロシュロー將軍はパリ第14区と第15区の境界広場およびその下の地下鉄駅の名において盛名をとどめ、広場の中心には、ベルフォール要塞に刻まれたライオンの浮き彫り彫像のライオン像（レプリカ）が設置された。

第3節 オルレアンの陥落

パリの西方と南方はパリとトゥールをつなぐ生命線である。もし、ここに大々的な抵抗組織が立ちあげられるならば、パリ包囲の独軍に脅威を与えるのは必至だった。この地域はドイツ側から見て最も遠いところに位置し、監視の眼が手薄になる危険性があった。したがって、地方からの援軍がパリに駆けつけようとすれば、迂回して南西側から接近することが考えられた。かくて、モルトケはこの地域を徹底的にマークした。独軍はまずセヌ川とその上流ロワン川沿いの町コルベイユ、ムラン、フォンテーヌブロー、モレ、ヌムールを抑え、ここに策敵拠点を置く。そして、パリの西方および西南方のラ・フェルテ＝アレ、ランブイエ、ウーダンに騎兵隊を配置した。10月初旬、モルトケは広大なボース平野

99 Girard, *Ibid.*, p.59.

にバイエルン兵を常時徘徊させ、パリへの補給線を監視させた。パリ盆地の西南部の統御は、メクレンブルク大公率いるプロイセン＝バイエルン混成軍団が受けもち、司令部はアルパジョンとエタンブ¹⁰⁰に置かれた。

かくも警戒された仏軍の実際の動静はどうかというと、大規模な戦闘をおこなう兵力を欠いているため、孤立した敵兵や輸送隊をゲリラ的に襲撃するのが関の山だった。たまたまジャンヴィル¹⁰¹とピティヴィエで小競り合いが起きたが、一方の側にもともと決戦の構えがない以上、こうした遭遇戦は局面を変えるほどには発展しない。あるとき独軍は嘘報を流す。すなわち、9月24日、オルレ안의守備兵はロワールの南方に撤退し、独軍がこの町を占拠した、と。ジャンヌ・ダルク神話で有名なオルレアンが嘘報の対象に選ばれたのは、ある種の心理的効果が期待されたのである。オルレアンは戦略上の要衝であり、この町が占拠できれば、ここから南方、西方、東方への展開がきわめて容易になるからだ。まもなくこれがデマであることが判明した¹⁰²。

志願兵を主力とするフランス側のゲリラ部隊はシャルトルとシャトーダンの間で活動を展開した。そのうちの一つ、リポウフスキー大佐を隊長とするパリのゲリラ兵は10月7日から8日にかけての夜間、こっそりパリを抜け出した。アブリスに宿営中のプロイセン兵を急襲し、5人の将校を殺害し、多数の兵卒を捕虜とした（アブリス事件）。数日後にシャトーダンに現われたときは68人の捕虜と99頭の馬と一緒にだった。シャトーダンでお祭り騒ぎが起きたのはいうまでもない。しかし、疲労困憊した捕虜は丁重に扱われ、軍用ビスケットや火酒まで振る舞われた¹⁰³。しかし、これはフランス側の“大勝利”にちがいないが、戦況を左右す

100 いずれもパリの南方、国道20号線上の町。

101 ウール＝エ＝ロワール県のJanville。

102 Roth, *Op. cit.*, p.231.

103 *Ibid.*, p.232.; Rousset, *Op. cit.*, p.10.

るほどのものではない。それどころか、この事件から衝撃を受けた独軍当局は8日、オルレアンほか主要都市の奪取計画を本格的に実行に移すことを決断。ヴィティヒ率いるプロイセン師団はシャルトルを、フォン・デア・タン元帥のバイエルン軍はオルレアンを、それぞれ攻略するよう命令を受けた¹⁰⁴。両軍はすぐに出立した。

ラ・モット＝ルージュ將軍指揮下のオルレアン守備隊すなわち第15軍団はオルレアンからジアンまでのロワール川沿いを警戒する。10月10日、オルレアン北方でパリへの街道筋にあたるアルトゥナーで戦闘が始まった。しかし、アルジェリアから引き戻されたばかりでいきなり戦闘に投入され、しかも夜通し歩かされた同軍団は、抵抗を続けるにあまりに脆弱であった。守備隊はすぐに劣勢に立たされ、オルレアンに向かい潰走しはじめる¹⁰⁵。

砲声を聞いて不安に陥ったオルレアンの住民は、押し戻されてきた兵士に戦況を尋ねた。野次馬は教会の鐘楼に昇って遠方での戦闘のもようを偵察した。確かな情報のないところでは必ずデマが横行する。このような場合、希望的観測が先行し、そのあとを悲報が追うというのがお決まりのパターンである。10月11日午後になり、逃亡兵が真実を運んできた。仏軍は破れ、バイエルン軍とプロイセン軍が追撃中ということだった¹⁰⁶。

独軍はその日の夕方、さしたる抵抗を受けることなくオルレアンに入城した。守備隊主力は南のラ・フェルテ＝サン＝トバン方向に退却した。ここに到着したのは深夜であり、そこに14日まで野営することになる。オルレアンの東方、ロワール川の上流沿いのジアンを守っていたモラン

104 Roth, *Ibid.*

105 Girard, *Op. cit.*, p.68.; Rousset, *Op. cit.*, p.11. ラ・モット＝ルージュにとって誤算だったのは、オルレアンから鉄道で軍隊を移動させたとき大混乱が生じてしまったことである。

106 Roth, *Op. cit.*, p.233.

ディー師団は干戈を交えることなく無疵状態を維持した¹⁰⁷。

10月10日～11日の戦鬪で両軍の損失勘定は独軍死傷者900、仏軍死傷者700だが、仏軍は1,800の捕虜を出し、銃5,000挺、機関車と貨車それぞれ10両、60両余を敵に渡した¹⁰⁸。

オルレアン失陥はロワール軍にとって重大な損失だった。オルレアンはパリへの道の橋頭堡の位置にあり、仏軍が防衛戦を展開するのに最適の位置にあったのである。ここを仏軍が抑えているかぎり、東西南北どこへ行くにも便利で、物資補給や兵員確保の点でまったく問題はなかったし、近隣一帯が深い森に覆われ、地理不案内な外敵にとって策敵活動もままならないため、防衛側の動静が洩れにくかった。それゆえ、オルレアンが陥ちたのはいかにも惜しかった。

10月14日、ラ・モット＝ルージュ将軍はその責任をとって辞任し、代わってオーレル・ド・パラディヌが地位に就いた。彼はかつてのクリミア戦争アルマの戦いで戦功を挙げ、将兵に威信をもつ勇士だった。高齢のため1870年1月より予備役にまわっていたのを、普仏戦争の開戦で8月17日より現役に戻されていたのである¹⁰⁹。将軍の初仕事は、第15軍団と第16軍団を合わせロワール軍の編成であった。訓練不足とみた彼は同軍をサルプリスで徹底的に鍛え直した。たびたび訓練の現場に足を運び、兵士らを前に祖国の不運、敗北の原因を説き、再起の可能性を力説した。兵士らには愛国心に訴え、献身と勇気を奮うよう促した。兵を前にした将軍の有名な演説が残っている。

「敵前で躊躇する兵士すべてについて、私は武器にものをいわせても進撃させることを決心した。そして、もし私自身がその義務を履行しないのなら、諸君は私を撃ち殺してもかまわない。」¹¹⁰

108 Rousset, *Op. cit.*, pp.16-17.

109 Tulard, Jean, *Dictionnaire du Second Empire*, Fayard, 1995, xix, 1347p., p.82.

110 Rivière, Armand, *Le gouvernement de la défense nationale à Tours*, E. Dentu, 1871, 183 p., p. 115.

こうして遊動軍は短期間で軍隊らしい規律を教え込まれ、上官命令への服従を示すようになった¹¹¹。

仏軍活動の停滞をみたプロイセン軍は策敵活動の範囲をボース平野全体に拡大する。搜索と徴発を受けた町のほとんどは抵抗の意志を示さなかったが、シャトーダンだけは別だった。ロワール戦線の西部地域は独軍が手薄であるとともに、仏軍もその正規軍は展開していなかった。志願兵のゲリラ部隊が出没し、敵の動向を探る程度だった。フォン・ヴィティッヒ將軍率いるプロイセン軍がシャトーダンを占領したとき、戦争の性格を一変させるような事件が発生した。

同軍は占領地に対する課税と強制徴発をおこなった。住民はこれをひどく恨んだ。そんなやさき、遙遙パリから脱出した志願兵リポウフスキー部隊が到着。ボース平野を横切る過程でしだいに数を増やし、アブリス事件を引き起こしたことは前述のとおりである。シャトーダンの城門に迫ったとき、同部隊は2個中隊と300人の国民衛兵を引き連れていた。町民の手引きでシャトーダンに入り、留守を預かっていた守備兵を殺傷または捕虜とした。バイエルン軍本隊が策敵行動のため町を留守にしていた隙を突いたのだ。しかし、10月18日正午近く、ヴィティッヒ軍がこの町に戻ってきた。プロイセン軍は歩兵6,000、騎兵2,000、36門の大砲を有する4個砲兵中隊であった。対するシャトーダンを守ったのは義勇兵と国民衛兵のみ総勢1,200ほどで、大砲は皆無だった。しかし、守備隊は街路の各所にバリケードを築き、銃眼を施した2軒の民家に籠もって抵抗の態度を示した。半鐘が鳴り響き、市民も持場に就いた。かくて、シャトーダンは集中砲火を浴び、三方から歩兵が雪崩れ込む。戦闘は夜9時まで続き、燃え上がる炎は夜空を焦がす。リポウフスキー司令官は300人ほどの残兵とともに北西方向に逃げ去った¹¹²。

111 Girard, *Op. cit.*, p.69

112 Rousset, *Op. cit.*, p.22.

非戦闘員が戦争協力した点が問題となった。将軍はただちに報復処置に移る。住民は略奪、放火、暴行、殺害を受けた。明らかにこの報復行為は度が過ぎており、バイエルン軍が被ったものと権衡を欠いていた。モルトケは、民間人が抵抗した証拠を固めておくようにとittedだけで、この暴行を公然と非難することはなかったが、内心は穏やかではなかった。彼はこの種の暴行を最も恐れていたのである。そのことが敵国民全体に知れると、不慮の愛国熱を呼び起こすことになりかねなかったからだ。シャトーダンの英雄的な戦いは長く歴史に刻まれることになる。派遣部は「シャトーダンは祖国の鑑なり」という宣言を発した¹¹³。

ロワール川近辺からセヌ川以北に眼を転じてみよう。ここに独軍の脅威はなかった。ルーアンとアミアンで編成中の遊動兵は比較的順調に仕上がりがつつあった。プロイセン軍の騎兵隊が偵察行動をしなかったわけではない。斥候兵はジゾール、ボーヴェ、クレルモン、モンディディエの各近辺をパトロールしていた。サン＝カンタンでは国民衛兵がプロイセン軍の進出を待ち受ける。川という川、運河という運河の橋は落され、すべての家屋に防備と銃眼が施され、街路にはバリケードが築かれた。守備隊不在の町には兵士が配置された。10月8日朝、槍騎兵の一団がフォブールに現われた。住民は抵抗の意思を示し、警鐘が鳴らされ、乱打されるタンバリンが非常事態を知らせた。町全体が興奮に包まれる。すぐに国民衛兵が終結し持場につく。戦闘が始まったが、プロイセン軍は数があまりに少なく、11人の捕虜を残して退却していった。町の共和派は「サン＝カンタンの英雄的な戦い」を賞賛する。この勝利談話に尾ひれがついたのはいうまでもない。しかし、よくよく考えてみると、独軍がこの地域を重視しなかったからこうした結果になったのであって、実際の闘争は小競り合い程度にすぎなかったのである¹¹⁴。

113 *Ibid.*; Girard, *Op. cit.*, p.69

114 Roth, *Op. cit.*, pp.233-234,